

パンデミックは世界を、社会の在り方を、思考方法を変える 変わらなければ

外出自粛が継続し、学校も休みとなっている。この長いトンネルにまだ出口は見えていない。罹患された方はもとより、多くの方々がこの不自由から早く抜け出せることを願っている。

一方、世界の新規感染者数は減少に転じ、このパンデミックもいずれは終焉に向かうことは間違いない。今はただ耐えること。この言葉は現在の状況を一番表わしていると思うのだが、これを一歩進め、「考える時間を与えられた」と考え、このマイナスをプラスへと転じるチャンスと捉えてはどうだろうか。

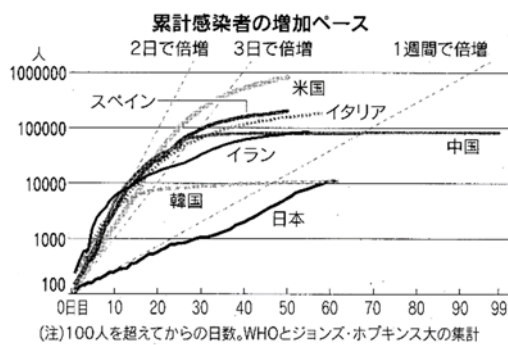
今までしたくてもできなかったことをする。

パンデミックの霧が晴れた後の行動計画を立てる。

家族の在り様を再確認し、より深い絆を築いていく。

等々、多くの項目がリストアップされる。

日本経済新聞 2020.4.28



有史以来、いくつもの感染症が人類を脅かしてきた

天然痘

- 日本では奈良時代に大流行し、政治体制に大きな影響を与えた
- 大航海時代に米大陸に持ち込まれ、アステカ帝国などが滅んだ

ペスト

- 「黒死病」と呼ばれ、中世ヨーロッパを襲った。
- 近世への移行を早めた

コレラ

- 大英帝国のインド支配を契機に世界に広まる。
- 日本では幕末に到来し社会の混乱を招いた

インフルエンザ

- 20世紀初頭のスペイン風邪では世界の人口の40分の1が死亡したと推計される

## ウイルスは世界を変える

DNAもRNAもどちらも生命の源とされる遺伝情報そのものだ。しかし、本質はむしろ対極にあるといえよう。

DNAは二重らせんの構造のおかげで、遺伝情報をコピー(複製)する際のエラーを修正し、忠実に伝える。安定と秩序を重んじながら、連続と次代に生命を引き継いでいく。このため進化はとてつゆゆっくりとしている。

一方、RNAは修復機能を持ち合わせていない。自らの情報の正確さにあまりこだわらない。宿主の力を借りて自由自在に変化(変異)を繰り返す。こうして人間の免疫をくぐり抜け、子孫を絶やさないようにする。

最も有名な疫病は中世ヨーロッパを襲ったペストだ。人口の3分の1の犠牲者を出し、極端な人口減から社会基盤がぐらつき封建制度の崩壊につながった。不治の病を前に人々の心のよりどころだったカトリック教会も無力だった。結果、宗教改革やルネサンスへと進展、中世は幕を閉じた。

天然痘はアステカ帝国を滅ぼし、大英帝国がコレラを世界に広げた。第1次世界大戦下、当時の新型インフルであるスペイン風邪が大流行し、若い兵士が次々と病に倒れ終戦を早めた。

パンデミックには時代や社会を大きく変える力がある。飢饉や侵略、戦争といった混乱に乗じて感染症が勢いを増し、大変革の時計を早回しするのかもしれない。

今回のパンデミックにより、社会の在り様は大きく変わるだろう。世界における中国の位置づけは、原油を中心とするエネルギーの在り方は、食糧自給の考え方は、そして情報社会と日本の今後は、働き方改革は……。世界に大変革が起こると思っている。この変革の中で、日本はどのように変わっていきけるのか？

生物は、その DNA がウイルスの感染により変化し、進化してきたとの話もある。過去のパンデミックにより社会が大きく変化したのも、上の新聞記事の年表が伝えるとおりである。今回のパンデミックにより世界が変わる。そして、日本も経済力を保ち、さらに増強しながらも、国民がさらに幸せを感じられる国へとジャンプしていくことが期待される。

マイナスをプラスに！ これが進化するということである。

#### ペスト (Wikipedia)

14 世紀に起きた大流行では、当時の世界人口 4 億 5000 万人の 22%にあたる 1 億人が死亡したと推計されている。ヨーロッパでは、1348 年から 1420 年にかけて断続的に流行した。ヨーロッパで猛威をふるったペストは、放置すると肺炎などの合併症によりほぼ全員が死亡し、たとえ治療を試みたとしても、当時の未熟な医療技術では十分な効果は得られず、致命率は 30%から 60%に及んだ。イングランドやイタリアでは人口の 8 割が死亡し、全滅した街や村もあった。ペストによってもたらされた人口減は、それまでの社会構造の変化を強えられる大きな打撃を与えた。

#### ルネサンス (Wikipedia)

イタリア・ルネサンスの時期としてはおおむね 14 世紀中頃のペスト流行以降、宗教改革後のトリエント公会議 (1545 年-1563 年) までが想定される。

#### アイザック・ニュートン (Wikipedia)

ペスト流行による故郷での長期休暇と三大業績  
また、ニュートンがこうした成果を得るのに有利に働くことになる、もうひとつの出来事があった。一人でじっくりと思案をめぐらす時間を得たのである。学位を取得したころ、ロンドンではペストが大流行しており (ペストは以前 14 世紀にヨーロッパの人口の 3 分の 1 以上を死亡させたほどの恐ろしい病気だった。ニュートンが学生のときのそれは数度目の襲来であった)、この影響でケンブリッジ大学も閉鎖されることになり、1665 年から 1666 年にかけて 2 度、ニュートンはカレッジで彼がしなければならなかった雑事から解放され、故郷のウールズソープへと戻り、カレッジですでに得ていた着想について自由に思考する時間を得た。また 1664 年、つまりペストで疎開する前に奨学生の試験に合格して奨学金を得ていたことも、故郷で落ち着いてじっくりと思案するのに役立った。こうしてニュートン

は故郷での休暇中に、「流率法 ((Method of Fluxions)) と彼が呼ぶもの (将来「微分積分学」と呼ばれることになる分野) や、プリズムでの分光の実験 (『光学』)、万有引力の着想などに没頭することができたのである。「ニュートンの三大業績」とされるものは、いずれもペスト禍を逃れて故郷の田舎に戻っていた 18 か月間の休暇中になしとげたことであり、すべて 25 歳ごろまでになされたものである。結局、このわずか 1 年半ほどの期間にニュートンの主要な業績の発見および証明がなされているため、この期間のことは「驚異の諸年」とも、「創造的休暇」とも呼ばれている。

- ・ 万有引力、運動方程式 (自然哲学の数学的諸原理 (プリンキア、1687 年))
- ・ 微積分法の発見
- ・ 二項定理の証明
- ・ 光のスペクトルの発見
- ・ 光の波と粒子としての 2 面性の発見
- ・ ニュートン式反射望遠鏡の製作
- ・ ケプラーの惑星運動法則を力学的に解明